

『1973年のピンボール』

～ 僕の青春とその終わり ～

村上 春樹

『1973年のピンボール』は、村上春樹、初期三部作の二作目の長編小説です。1980年に単行本化され、『風の歌を聴け』に続き、2年連続芥川賞候補にあがりましたが、受賞はなりませんでした。

この作品の特徴は、主人公「僕」の物語と友人「鼠」の物語に分かれ、その二つの物語がパラレル（平行）に進行していくことです。村上はこの形式を用いて幾つもの作品を書いています。

“ピンボール”とは、傾斜した盤の上を転がる球を打ち返すアーケードゲームです。プレイヤーはフリッパーと呼ばれるバーを動かして、球を落球させないように打ち返し得点を重ねるといったものです。かつては、少なくとも1960年代から70年代にかけて、ゲームセンターの主流であり、温泉ホテルの遊技場には必ずあった業務用のゲームマシンでした。

学生時代、“ピンボール”にのめり込んだ「僕」は、時代とともに姿を消してしまった“ピンボールマシン”を探します。ようやく78台も集めているピンボールコレクターを突き止め、お気に入りだった、“ピンボールマシン”と再会します。そのことが小説のタイトルになっています。

正直、この小説のテーマが何であるのかを一言で語るのは、かなり難しいことです。村上作品は読みやすいのに難解とよく言われます。彼独特の比喻と非現実的な暗示に、いつのまにか引き込まれてしまった、というのが私の率直な感想です。

